群馬大学教育学部　尾崎研究室研究調査報告第２輯

前橋天神山古墳発掘調査概報

群馬大学教育学部

史学・尾崎研究室

目　　次

まえがき

Ⅰ　はじめに …… 1頁

Ⅱ　調査経過の概要 …… 1

Ⅲ　位置及び古墳の分布 …… 4

Ⅳ　墳丘及び外部施設 …… 5

(1)　規模及び形状 …… 5

(2)　葺石及び墳丘斜面の形状 …… 5

(3)　墳丘頂上部 …… 6

Ⅴ　埋葬施設 …… 6

Ⅵ　周溝及び墳丘構築時の地表面 …… 7

(1)　周溝 …… 7

(2)　墳丘構築時の地表面 …… 7

Ⅶ　遺物 …… 7

Ⅷ　まとめ …… 8

ま　え　が　き

尾　崎　喜左雄

天神山古墳の発掘調査は酷暑の7月末であった。生い繁る篠を刈り，根を掘りとっての作業には苦難倍加した。はじめ，市教委から私に調査の依頼があったが，広瀬古墳群調査の一環として，松島君に担当して貰うことにした。3月には山王町の古墳を調査し，昨年は八幡山古墳周濠の調査を担当して貰ったからである。前橋工高歴史研究班の生徒諸君の情熱と，群大尾崎研究室の学生諸君の応援とによって，遂に調査の過重さは克服されたのである。その結果は石田川式土器の配列と浅間山噴山浮石の層の古墳基盤とを発見した。とりあえず，その概報をまとめることにした。時に「石田川」の刊行記念会にあたり，松島君の功績に花を添えようとするものである。

前橋天神山古墳発掘調査概報

松　島　栄　治

Ⅰ　はじめに

昭和４３年７月，報告者及び県立前橋工業高校歴史研究部は，前橋市教育委員会から，同市後閑町所在の天神山古墳（上毛古墳綜覧上川淵村第７１号墳）の発掘調査の依頼を受けた。

ところで，この天神山古墳は，前橋市が都市計画によって造成する所謂広瀬団地内に在るため，市教育委員会はその措置について昭和４０年に検討を行い，一応保存の必要を認めたものであった。しかし，その後情勢が変化し，群馬県教育委員会の行政的な指導もあって平夷することになったのである。

昭和４３年６月，天神山古墳は市内部の手続上の行違いもあってか，突如としてその巨大な前方部が破壊された。この事に対して地元研究者の間からは破壊の中止と調査の必要性が強く要望され，ここに前橋市教育委員会は改めて，調査の計画をたてるに至ったのである。

発掘調査は，群馬大学教授尾崎喜左雄博士，共愛学園講師藤岡一雄氏等の指導と協力を得て，昭和４３年７月１３日の午後から１４日にかけての予備調査に始まり，同月２１日から翌８月６日までの間を本格的な調査期間とし，更に降って１１月１３，１６，１７，２０日には周溝部の調査を行ない，併せて，前後２３日間にわたって実施した。この間予備調査と本格的な調査期間のうち７月３１日までの間と１１月１３，１６，１７の各調査は県立前橋工業高校歴史研究部の卒業生及び生徒が，８月１日から６日までと１１月２０日の調査は群馬大学教育学部史学研究室尾崎教室の卒業生及び学生が主体的に調査に当ったが，他に県立中央高校郷土部の生徒等多くの人々の協力があった。

また，発掘調査後の遺物及び実測図等諸資料は整理は前工歴史研究部が中心となって当り，同部卒業生笹岡規雄君等の協力を得て進められ，現在なお進行中である。

なお，調査に際しての諸準備，設営等事務的な仕事は，前橋市教育委員会が担当し，多忙の中，社会教育課長石川頼母，管理係長小海国好，社教主事阿久津宗二各先生方の多大の御尽力と御支援を得た。ここに記して，篤く感謝の意を表すると共に深く御礼申し上げる次第である。

Ⅱ　調査経過の概要

７月１３日，１４日

トレンチを入れる部分を設定し，その部分の雑木及び篠等の刈取りを行った

７月２１日

後円部頂上から墳丘の主軸線に沿って，西南方（前方部方向）に向けて，Ａトレンチを，反対側北東裾部に向けてＢトレンチを，それぞれ幅３ｍにとって掘り始めた。頂上部において，扁平な石

による石組？がやゝ方形に出土し，その下部約２０cmからは拳大の石による石敷が平担の状態で認められ，それに接して古い形式の土師器破片が数片発見された。

７月２２日

後円部頂上からは，かなりまとまって，赤色顔料で塗彩した土師破片が発見された。

又，Ａトレンチの西端，後円部と前方部のくびれ部の切断面において，墳丘築造時の地表面の検討が行なわれ，この築造作業面は約１５cmの厚さからなる火山灰層であることが確認された。

７月２３日

Ａ及びＢトレンチに直交させて，墳頂部から南西方向に幅３ｍのＣトレンチを掘る。しかし，南側斜面は既に破壊，変形され，大分原形を損じているために，その長さは約８ｍに止めた。同じく墳頂部から北西方向裾部に向けて，幅３ｍのＤトレンチを掘り始めた。よって，本墳の後円部は，これらＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄの各トレンチによって十字形に覆われることになった。

７月２４日

Ｃトレンチの頂上部付近においては，小礫が比較的多く発見され，時に緑泥変岩の小片もめだつ。地層的にも攪乱を受けた様子が明らかである。又，頂上部においてほぼ方形状に認められる石組は，その下部の石敷と直接関連のないものと認められた。

７月２５日

Ｃトレンチを除く各トレンチにおいて，葺石の確認を急いだ。その結果，Ｂ・Ｄ各トレンチにおいて，葺石に使用されたと思われる多数の石を確認した。又，Ｂトレンチにおいては，基段らしき部分が認められた。

７月２６日

墳頂部において，やゝ復元可能とみられる赤色顔料の塗彩された小形の土器が発見された。この部分は周縁部に比べて石敷がやゝあれており攪乱の痕跡が顕著である。Ｂ・Ｄトレンチにおいては，ほぼ全面的に上層部の土が除かれ葺石らしきものが出現した。しかし，その状態は石を組んだというよりは，むしろ貼ったという様な感じであり葺石の面としては疑問がもたれた。従って，各トレンチにおいて，縦に約１ｍ５０cmの幅で更に掘り下げることとした。その結果，下部にもなお葺石の石らしきものが，ところによっては１ｍ以上も認められ，上部の石面は，本来の葺石の面でないことが明らかとなった。又，ＤトレンチにおいてもＢトレンチ同様墳丘斜面に窪みが認められ，基段の存在がはっきりし，墳丘斜面は大きく二段に構成されていることが判明した。

７月２７日

墳頂部中央の石敷の乱れている部分に，盗掘のための竪穴が掘られていることがわかった。

７月２８日

台風が接近し雨天となる。発掘作業は休止となる。

７月２９日

台風の余波により時おり雨が降る。このため細かな作業を避けて，墳頂部の石敷の部分の拡張を行う。拳大の石による石敷は，ほぼ平坦に続き，北側周縁部においては，底部穿孔の赤色顔料を塗

彩した複口縁壺形土器が，原位置とみられる位置において発見された。

7月30日

B・Dトレンチにおいては，葺石の根石を求めて裾部の調査が進行した。その結果B，D各トレンチとも葺石の根石あるいはその推定位置から，周溝の上縁までの間に，約1m幅の平担部分のあることが認められた。又，周溝の内法の部分には，墳丘斜面の葺石よりやゝ小さな石を用いて，小口あるいは平積に組んでいたことが，その痕跡により明らかとなった。墳丘頂上部においては，石敷面の精査が進むに従って，底部穿孔の赤色顔料の塗彩された土器破片群等の発見が続き，これら土器群は，墳丘石敷面の周辺部に配列されていたものと推定されるに至った。

7月31日

本日の調査は，ほとんど墳頂部に集中され，石敷を追っての南側への拡張と，既に出現した石敷面の精査と土器破片の出土状態の実測等が行なわれた。

8月1日

B・Dトレンチにおいて葺石の調査が行なわれ，墳丘裾部と周溝との間の幅狭い基段のほかに斜面の部分に2カ所の基段が確認された。そして，葺石はこれら基段の上，下にやや直斜状に，小口あるいは平積に葺かれていたことが確認された。墳頂部の石敷は，南側になお残されていることがわかり，その部分の拡張作業が行なわれた。

8月2日

墳丘斜面の葺石の調査が更に進められ，基段の状態も次第にはっきりしてきた。即ち斜面上に設けられた2つの基段は，その平坦部がテラス状に石で敷かれていたことも明らかとなった。なお，Bトレンチの中位基段（裾部の基段を下位基段とし，墳丘斜面上につくられた2つの基段のうち，下の基段を中位基段，上の基段を上位基段とする。）の石敷に接して，石田川式土器の甕形土器破片が数片発見された。

8月3日

墳丘頂上部においては石敷の範囲を確める作業と土器の出土状態等についての調査が行なわれた。石敷の範囲は，土器等の出土状態からして北側周辺部はやゝ原状を保っているとみられるが，他は既に崩されているとみられ，特に南側は甚だしい。従って，その形状や広さは明らかではないが，直径約25m程の円形と推定される。そして，そこに発見される底部穿孔の赤色顔料によって塗彩された複口縁の壺形土器等の数は，底部等の出土状態からして，おそらく数10個にも達するものと考えられる。又，その配列は，現在検討中であるが，特に周縁部においては，ある方向性をもって配置されたことは明らかである。

A・B・C・D各トレンチの実測が完了した。Cトレンチの切断面においては，頂上部石敷の面がかなり急激に下降する部分のあることは，既に確認されていたが，本日，この部分を更に拡張調査すると，長さ約7m，幅約1mの礫床状の埋葬施設を発見することが出来た。しかし，残念なことには既に盗掘され，副葬品等は全く発見することができなかった。

8月5日

礫床状の埋葬遺物の精査及び実測を行った。他方，墳頂部の石敷の部分をA・B・Dの各トレンチの範囲で断ち割った。しかし，特記するような痕跡は認められなかった。

8月6日

礫床状遺構の調査を続行し終了した。よって，本調査は本日をもって一応終了した。

11月13，16，17，20日

墳丘の主軸線に沿って，その南側裾部に接して，道路がつくられ，その中央部には下水道管が敷設されることとなり，そのための工事が行なわれた。たまたま，その切断面に周溝部が出現したので，周溝の規模，形状ならびに埋没の状態等を知るために，その調査を行ない，実測図，写真等の記録の作製を行なった。

Ⅲ　位置及び古墳の分布

前橋天神山古墳は，上毛古墳綜覧上川淵村第71号墳で，前橋市後閑町字坊山1224番地にある。

後閑町の東部は，旧利根川の河跡とみられる広瀬川右岸段丘上にあるが，本古墳はこの段丘崖から約80m離れた位置に，その主軸線をやゝ北東方から南西方にとり，前方部を南西方に向けてあり，所謂朝倉団地と広瀬団地を結ぶ主要道路は，その前方部の先端部ぎりぎりに設けられていた。

この天神山古墳の周辺は，群馬県においても古墳の群集地帯として有名な所で，広瀬川右岸に沿って，北方には所謂朝倉古墳群が，南方には山王古墳群が連続する。従って，これら広瀬川右岸の古墳を一括して仮に広瀬古墳群と命名すれば，本墳は地理的にもその中心的位置に当ると思われる。更に，本墳の北方約400mには国指定史蹟である八幡山古墳（前方後方墳）があり，南方約250mには大部分崩壊され，その痕跡を止めているに過ぎないが，ほぼ本古墳に匹敵するとみられる飯玉神社古墳（前方後円墳）がある。これらの古墳を中心とする広瀬古墳群は，上毛古墳綜覧によると約150基の古墳からなり，うち前方後円墳は16基，前方後方墳1基，他は円墳とされている。このうち，現在までに学術的に発掘調査されたものはほんの数基に過ぎない。しかし，その結果からすれば，朝倉Ⅱ号墳のように4世紀末に比定されるものもあれば，上陽村24号墳[註2]のように6世紀末のものとみられるもの[註1]，更に山王大塚（上毛古墳綜覧上陽村15号墳）のように截石積石室とみられる内部構造をもつ比較的新しいとみられるもの[註3]まで認められ，本古墳群は，群馬県地方の発生期の古墳からその終末期の古墳まで各期にわたっているとみられる。かかる古墳群の性格の中に在って，本天神山古墳は，後述するように，出土遺物，埋葬施設更に築造面に認められた浮石層等からして，最も古い時期に属する古墳の1つとして，あるいはその規模等からして，本古墳の祖元的なものとして，あるいは又主墳的なものとして認めることができるのである。

註1　山本良知　朝倉第Ⅱ号古墳発掘調査概報

註2　昭和42年3月　前工歴史研究部発掘調査（礎第1号所載）

註3　昭和29年　群大史学研究室発掘調査

Ⅳ　墳丘及び外部施設

(1)　期模及び形状

本墳は主軸線を南から西へ約３５度をとり，前方部をほぼ南西方に向けた前方後円墳である。

現在墳丘は全面的に雑木と篠等に覆われていたが，かっては坊山と呼ばれて開発され，特にその南面に仏教関係の建築遺構と室町期とみられる五輪塔の石造物が多く認められ，かなり利用されていたものと考えられる。事実前橋市が測量した墳丘実測図によると，墳丘南面の変形が目立ち，特に前方部南側は旧態を止めぬ程大きく変形されており，利用の跡が著しい。ところで調査の結果を参照しつつ，その規模及び形状について図上複元を試みてみるとおおよそ次の様になる。

墳丘全長	１２０m
後円部径	６０m
前方部幅	５５m
くびれぶ幅	１５m
後円部高	９m
前方部高	７m

なお，以上の複元計測値は，礫床状の埋葬主体部を後円部中央にとり，その中心軸を墳丘の主軸線として，比較的原状を止めているとみられる前方部北側裾部の線と，前方部北側稜線とを活かして作製したもので絶対的なものではない。しかし近似値とみられよう。従って，本墳は，本地方の他の前方後円墳に比して，前方部の所謂胴部が特に狭く長いものであって，本地方の前方後円墳の形状としては，太田市所在の朝子塚古墳と同様古い形とみられるものである。
註

(2)　葺石及び墳丘斜面の形状

前方部は発掘調査以前既に破壊されてしまったために明らかではないが，後円部については，Ｂトレンチ（墳丘主軸線に沿って墳頂部から北東部裾部にかけて設定したもの）及びＤトレンチ（主軸線に直交させ，墳頂から北西裾部にかけて設定したもの）によって，ある程度明らかになった。まず，墳丘斜面は細かくは３段の基段とそれを結ぶ直斜状の葺石の線によって構成される。即ち，下位基段は，盛土下の地表面をＢトレンチで約２５度，Ｄトレンチでは約５０度の角度でＢトレンチで７０cm，Ｄトレンチで４５cm程掘り下げ，同溝の上縁との間に設けた幅約１mのもので，基段と云うよりはむしろ墳丘基底部と云った方が良いかと思われるものである。中位基段は下位基段より，約１m２０cm上の位置に在り，下位基段と異なり完全に墳丘盛土の斜面に設けられたものである。その幅は約３m前後あって，本墳の基段のうち最も大きい。その平坦部は一面にテラス状に石が貼られ，更に，そこから上方及び下方へは，利根川の人頭大の転石をもって小口あるいは平積に，ほぼ直斜状に約３.５度の傾斜をもって葺石が葺かれていたものと推定された。上位基段は中位基段からなお，Ｂトレンチで３m５０cm，Ｄトレンチでは２m７０cmの上部にあって，その幅は約２mから３mであって，この平坦部はＤトレンチにおいては認められなかったがＢトレンチは中位基段同様石を貼っていたものと思われる。この上位基段から，墳頂にかけての傾斜面は他に比して最も長い。その上端部は，既に崩壊変形しており推測の域を出ないが，

おそらくその下方同様，葺石が直斜状あるいはそれに近い状態でほぼ全面を覆っていたものと推定される。

(3) 墳丘頂上部

墳頂中央部において約２０cmの積土を除去すると拳大の石によるほぼ平坦な石敷が発見され，その範囲は埋葬主体部を中心にして直径２５m程と推定された。この石敷は盗掘箇所及び北西部を除く周辺部はあらされたり，あるいはけずり取られる等して，かなり変形しているものとみられたが，それ以外の部分は比較的良好の状態で発見された。特に，比西部周辺においては，底部穿孔の赤色顔料による塗彩された複口縁の壺形土器片が，原位置あるいはその付近とみられる位置において，一定の方向性をもって，少なくとも数個体分発見され，この部分があまりあらされたり変形されていないことを示していた。又，この面における土器の出土状態は，底部は僅かながら石敷の面に埋められたような状態であり，その破片は比較的大きかったが，それ以外は細かく割れて飛散した状態であり，これらの土器は本来全面的に埋没されていたのではなく，石敷の上に配置されていたものと推定された。従って，この墳頂部の石敷は，ほぼ中央部に位置する埋葬主体部を除いて露出したものと推定される。

註　昭和３１年　群馬大学史学研究室外形調査

Ⅴ　埋葬施設

Ｃトレンチの上部切断面において確認されていた石敷の面の落込みは，その周辺に認められたおびただしい小礫と共に，発見の当初から注目されていた部分であったが，調査の進展に伴って，これが埋葬主体部であることが確認された。そこで，改めてこの位置についてみると，現状では墳頂部南端あるいはそれに近い位置とみられるが，石敷の南東部への拡がり，あるいは墳丘全体としての観察からすると，ほぼ中央部と推定される。又，その主軸線は，墳丘の主軸線に平行するとみられる。この施設の全貌は，盗掘によって攪乱，破壊されてしまったために明らかでないが，残存した遺構は，石敷上面をそのまゝ窪めた礫床状のもので，大きさはその上縁で長さ７ｍ５０cm，最大幅１ｍ５０cm，深さ５０cmのやや舟形をしたものであった。以上のほか，本埋葬施設ならびにその構築法を積極的に証明するものはなかったが，しかし盗掘の際に攪乱，移動した土の中に認められた多くの小礫と１０数片にものぼる緑泥変岩片，更に，その周辺に無造作に重ねられた扁平の川原石等は，次に記す埋葬施設と石敷との関連等からしても，その考察に当って有力な資料となり得るものと考える。即ち埋葬施設と石敷との関連は，前にも記したように，石敷の面をそのまま窪めて礫床状の部分を構築しているのであって，その被覆構造等も含めて埋葬方法あるいはその技術的な面からして，この深さではおそらく納まりきらなかったものと思われる。他方礫床状の部分を構築する際の基盤となっている石敷の面は，出土土器との関連からして，少なくとも，土器の配列されていた墳丘周辺部は露出していたものと考えられるのである。従って，礫床状の被覆構造は，石敷面のレベルにより上に構築されたと考えざるを得ない。よって，本墳の埋葬施設は，後円部墳頂の石敷平坦部のほぼ中央に，墳丘主軸線にほぼ平行して，壇状に構築されていたものと推定される。

Ⅵ　周溝及び墳丘構築時の地表面

(1)　周　　溝

Ｂ，Ｄトレンチの裾部において，原地表面を約４５度の傾斜をもって約６０cm切込んだ周溝の縁及び内法部が確認された。この縁は，前に記した下位基段の外縁に当るものである。又，その内法部の所謂汀線に相当する部分には，長さ２０cm前後の細長い石をもって葺石状に組む等入念のものであった。しかし墳丘周辺部の現地表面からは，明らかに周溝を思わせるような形跡は少なく，僅かに墳丘南東部広瀬川河岸崖寄りの裾部から約６０m離れた位置に，高さ８０cm程で幅約１４mの盛土状のものが認められ，周溝外堤を思わせるものがあるのみであった。ところで，１１月，墳丘南側裾部に接して下水管附設工事が行なわれ，その際，切断面に周溝がひっかかり，ある程度周溝の状態を把握することが出来た。その結果は現在整理中であるが，その概要についてみれば，後円部裾部周辺においては深く，その推積の状態からしても見事な溝としての体裁と役割りを果していたとみられるが，外辺に向うに従って底部が上昇し浅くなる傾向がみられ，特に外縁部は地山を僅か３０cm程に切込んで内法とする程度で，裾部の内法でみられたような入念さは全く認められなかった。しかし，その外側は，何カ所か掘り上げられた跡があり，それらとの関連からして，前に記した周溝外堤とみられる盛土は，一応周溝と関連あるもののように認められた。なお，これらの調査結果からして，本墳の周溝の幅は４６mを越すものと推定される。しかし，その平面的な形状は明らかでない。

(2)　墳丘構築時の地表面

墳丘くびれ部の前方部破壊の際の切断面とその反対側の北東裾部の２カ所において，墳丘築造時の地表面の検討を行なった。その結果は，比較的硬くしまった酸化された黄色砂層を地山とし，その上部に２０cm程の褐色土層，１５cm程の暗褐色土層，更に約１５cmの黒色土層が認められた。ただし，これらの層の堆積は極めて漸移的であると同時に，いずれの層からも浮石等火山噴出物等は検出されず，明確に区分するのは困難であった。黒色土層の上部は１mmから５mm程の浮石よりなる約１５cmの浮石層が認められた。この層の下端は黒色土によって汚染され，上端も又かなりあらされて，全体的に黒っぽい感じがするが，しかし，詳細に観察するとかなり純粋な浮石層であることが確認された。この浮石層と墳丘盛土との間には厚さ２cm前後の黒色土と褐色の砂層のまざり合った層が認められる。しかし，この層はその混合の状態あるいはその上面がかたく踏みかためられている等のことからして，明らかに墳丘構築の際に置かれた人為的な層であり，おそらく墳丘構築のための作業面として考えられる。従って，墳丘構築時の地表面としては，浮石層の上面をもって当てる事が妥当と思われる。

Ⅶ　遺　　物

本墳の埋葬主体部は既に完全盗掘され，前方部も又調査前に平夷されてしまったので，今回の調査によって知り得た遺物は後円部頂上石敷の面に，あるいは葺石の間又はその上部から発見された土器類のみである。これらの土器類は，Ｂトレンチ中位基段において発見された脚台付甕形土器の

破片等，一部のものを除いてそのことごとくは，本来墳頂部の石敷上に置かれていたものと推定される。即ち，Bトレンチにおいて，多くの土器片の発見があったが，これらは上部から崩落して堆積した葺石ならびに土中から発見されたものであって，原位置とみられる破片は全く見当らなかった。墳頂部石敷上における土器の配列の状態は，既に記したように，北西部の周辺に特に多く出土し，しかも，ここには原位置とみられる底部破片等があり，配置の状況がある程度判明した。即ち，数個分の破片群にみる土器の配列は石敷の周縁に沿って一定の方向性をもって認められ，これがただ放置されたものでない事を示していた。又，出土位置は，墳頂周辺部のみでなく，かなり中央部に寄った場所からも認められ，これらが周辺部の配列と如何に関連するか問題とされる。総じて土器の配列については，現在なお検討中であって，今後の結果に待ち度い。続いて，これら土器の配置の状態であるが，出土状態からすれば，底部とその周辺は比較的まとまって石敷面下から出土し，しかも破片の大きさも大きいのが目立つ。これに対して，腹部以上は飛散して発見され破片も細かい。このことは，土器の配置に当って，土器の底部を僅かながら石敷の中に埋めるようにして置き，腹部以上は露出していたものと推定される。出土し発見された土器は現在整理中であるが，その器種は復口縁壺形土器を中心に，細口の坩，所謂小形丸底土器とみられるもの，更に高坏，器台等であるが，壺形土器が圧倒的に多い。又，その数を底部等によって概算すると，おそらく数１０個を下らないとみられる。勿論，このほかに不幸にしてわれわれの目にとまらなかったもの，あるいは調査以前に散逸してしまったものもある筈であるから，その数は莫大のものであったと考えられる。これらの土器の共通する特色は，比較的精選された胎土が使用され，焼成等も良好である。器表には朱とみられる赤色顔料によるほぼ全面的な塗彩がなされ，底部には焼成前の穿孔が認められる等のことである。以下，今日までに整理され復元された土器のうち，特に本遺物を代表する復口縁壺形土器について記すことにする。

器体は下ぶくれのした丸形で最大幅は中位以下にある。底部には僅かに突出した平底を付すものが多く，その中心部はするどい器具によって一気に穿孔されている。頸部は比較的細まって直立あるいは直斜するものが多いが，中には湾曲して外反するとみられるものもある。下部口縁は，水平に近いまで大きく外反し，上部口縁に連なる。下部口縁と上部口縁の接合は鋭い稜線を残す。上部口縁も下部口縁同様大きく外反し，その上縁の直径は，胴部最大径にせまるものとみられる。又，器高は３５cm前後とみられるが，そのうち，口辺部は１０cm前後で約⅓を占めるとみられる。全体的に口辺部が異常の程に強調されたもので，器表全面にみられる赤色顔料による塗彩と共に，この種の土器の性格を物語っているものと思われる。

Ⅷ　まとめ

以上，前橋天神山古墳の発掘調査についてその概略を記したが，本日まだ遺物の整理や調査資料の充分な検討をしていない。従って，ここに新らしい考察等はさしひかえ，今までに確認されたいくつかの成果ならびに結論について記してまとめに代えたい。

1. 墳丘の形状を推定復元すると，その全長を後円部と前方部が折半するような型であり，又，所

謂胴部が比較的狭く長い。

2. 墳丘斜面の構成は，大きく2段に構成され，その斜面はほぼ直斜状に葺石が施されていた。

3. 墳頂部はほぼ平坦に石敷され，特にその周辺部等には赤色の顔料によって塗彩された底部穿孔の複口縁壺形土器等が多数配列されていた。

4. 発見された土器の多くは焼成前の穿孔にみられたように，明らかに儀器化されたもので，本古墳に配列するために製作したものであり，その原型は石田川式土器に求めるのが妥当と思われる。

5. 埋葬主体部は，墳頂部にその主軸線に平行させて構築され，その礫床状部は石敷下にあるが，被覆構造は石敷面上に壇上につくられたものと推定される。

6. 墳丘の構築面は約15cmからなる浮石層で，この層は浅間山噴火の際の火山灰とみられ，この堆積の時期は4世紀の前半と推定される。

7. 周溝は裾部に近い部分は深く，外縁に向って漸次浅くなる。その幅は46m前後とみられる。なお，外縁に接して，外堤らしきものも認められる。

昭和43年11月29日　印刷
昭和43年11月30日　発行

群馬大学教育学部史学・尾崎研究室研究調査報告第2輯

前橋天神山古墳発掘調査概報

群馬大学教育学部史学・尾崎研究室
前橋市日吉町1－14－7

印刷　学文館印刷　電㉔4425
前橋市本町3－10－9